

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	大橋 香奈
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部教授	加藤 文俊
	副 査	政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部教授	國枝 孝弘
		政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部准教授	水野 大二郎
		社会学研究科委員	兼文学部教授	岡原 正幸
学力確認担当者：				
<p>1. 論文の目的と構成</p> <p>大橋香奈君が提出した学位請求論文は、『移動する「家族」』の映像エスノグラフィ実践：リサーチ・オン・ザ・ムーブ と題し、国境を越えて移動する人々の「トランスナショナルな生活世界」に立ち現れる「家族」のありようについて、映像実践を通してアプローチするものである。本テーマは、大橋君自身の移動経験から来る問題意識に根ざしており、定住を前提とする価値観や仕組みを問い直すことが出発点となっている。現代社会において、私たちの生活は「グローバル化」「メディア化」「個人化」といった概念で性格づけられることが多いが、その中で「家族」がどのように定義・再定義されるのか、また生きる基盤としての他者とのつながりがいかにして形成、維持されるかを問い、新しい理解を創造することを目指している。全体を通して、ジョン・アーリ (John Urry) に代表されるモビリティーズ研究の系譜をふまえながら、概念的整理を試みている。</p> <p>本研究では、定性的な調査方法としてサラ・ピンク (Sarah Pink) らによる「デジタルエスノグラフィ」の動向を参照しつつ、映像エスノグラフィを採用し、4年間をかけて5名の協力者と向き合い、彼/彼女らと協働しながら映像作品 (ドキュメンタリー映像) 『移動する「家族」 - "Families" on the move』を完成させた。様々な条件のもとで作品の上映会を開催することで、観賞者の解釈・批評の多様性に触れ、さらに自分自身の調査研究を批判的に省察する円環的な調査プロセスを設計した。一連の実践を経て、移動に関わる現象を研究し、その成果を世に問いながら、調査者自らも移動する「リサーチ・オン・ザ・ムーブ」という方法と態度を提案している。</p> <p>論文は全7章で構成されている。まず、第1章では、「モビリティーズ・パラダイム」の視座転換について述べる。ジョン・アーリに代表されるモビリティーズ研究の系譜を整理し、モバイルな「生」をめぐる知というテーマを際立たせている。まず定住という価値観を前提とする諸制度によって、私たちの移動性/移動の意味や役割が見過ごされてきたことを問う。たとえばアーリは多様な「モビリティーズ」として、①仕事、余暇、家庭生活、快楽、移住等のために行われる身体による旅、②生産者、消費者、小売店への物の物理的な移動など、③新聞や報道等に表出するイメージによって喚起される想像の旅、④リアルタイムでなされるバーチャルな移動、⑤伝言、手紙、電話等を介して実現する通信による旅を挙げている。私たちは、こうした多様な「モビリティーズ」が複雑に絡み合う中で、モバイルな「生」を生きている。こうした理解によって、人々の相互作用や社会関係を、移動性/移動を明示的に取り扱いながら考察する意義が語られる。その上で、従前の議論を発展させるために必要な、概念的枠組、調査手法の開発、成果還元のための社会との接続に関する課題設定を行う。</p>				

論文審査の要旨及び担当者

No.2

第2章では、第1章の問題意識を前提に、モバイルな「生」をとらえるための「トランスナショナルな生活世界」という概念的枠組を提示する。現代においては、人、モノ、資本、情報、イメージの移動にかかる時間・コストは大幅に減少し、異なる国で生活を営みながらもトランスナショナルな交流・交歓が可能となった。その中で「家族」の形成、維持は重要な課題となる。先行研究をふまえながら、移動性/移動を前提とする調査研究において「家族」を扱うことの意義を述べる。多様な関係性のあり方が社会的に認知されるとともに、「家族」という概念自体がこれまで以上に広い文脈に位置づけられる必要があるが、本研究では、とくに「生きられた経験に根ざした知を創造すること」を標榜する。

第3章は、研究の方法論に関する詳述に充てられている。モバイルな「生」の中に立ち現れる「家族」をとらえるための方法として、本研究では映像エスノグラフィーを採用する。質的研究におけるビジュアルデータの活用については様々な試みがあるが、本研究では以下の3点からエスノグラフィックな知のあり方を理解している。①撮影に際しては人々の生活に介入せざるをえない、②調査者と調査の参加者とのコミュニケーションや交渉の所産として理解がつくられる、③エスノグラフィーによってつくられる知は文脈に依存する。このようにエスノグラフィックな知を理解しながら、調査対象者を「協力者」「参加者」として位置づけ、協働的に映像制作を進める方法を採用する。また、調査者自身が、どのように状況を定義し理解していくかについて省察的な実践の重要性について触れている。

続く第4～6章では、第3章で提示された方法論に即した映像実践について、それぞれ「調査」「制作」「上映」の3つの段階に分けて詳述している。第4章の「調査」は、5名の調査協力者との出会い、関係づくりに始まり、映像制作のためのデータ獲得を進める段階を指す。可能な限り一人ひとりの日常生活の多様な生活の場面に立ち会うために、一人に対しておよそ1年間という調査期間を設定し、その間に7～10回のインタビューを行った。当然のことながら、それぞれの日常生活に介入することになり、その過程で調査者と協力者との関係も逐次組み換えられてゆく。調査者自身がアクセスできない場合には、協力者に依頼して「ビデオツアー」や「再演」、あるいは写真等の生活記録の提供を求めることで、映像作品の素材を補強している。

第5章では「制作」に関わる段階が説明されている。それぞれの協力者とともに、上述の「ビデオツアー」等のデータを加えた膨大なナラティブをふり返り、再編成する作業である。映像によって人々の生活世界を描く際、データを獲得した以降は調査者の手によって編集が行われることが多い。それに対して本研究では、獲得されたデータは調査者に独占されることなく、一連のナラティブは調査協力者とともにストーリーとして紡がれてゆく。また、どのような言語で語るかについては協力者の判断に委ねており、結果として完成した映像作品には日本語・英語・スペイン語のナレーションと字幕が添えられることになった。章の後半は、完成した映像の主要なシーンのリストで構成されている。論文においては図版とテキストで表現せざるをえないが、調査者が協力者と協働しながら修正をくり返し、緻密な編集作業が行われたことがわかる。一人ひとりのエピソードは独立しており、それぞれの協力者とともに映像作品を確認・承認することで編集作業を終了させている。5つの映像作品はオムニバスとして束ねられ、『移動する「家族」 - "Families" on the move』という作品となった。

第6章では、完成した映像作品とともに大橋君自身が移動し、上映会を開催した経

緯・経過が紹介されている。20箇所での上映会を通して482人の参加者と対話し、本研究の中心的テーマである「家族」について議論している。上映会は「出展」「自主企画」「共同企画」「招待」という4つのタイプに大別される。鑑賞者は中学生からお年寄りまで多様な年齢層をカバーし、会場も飲食店、介護施設、公共施設（ホール）にいたるまで様々な条件で実施された。上映会で参加者と語り、その中でえられた知見を研究の考察に接続する円環的なプロセスである。毎回の上映会で、参加者は（簡単な設問が記載された）コメントシートを記入し、その上で大橋君との対話の時間を過ごしている。第3章でも述べられているが、本研究における上映会実施の方法と態度は、「ABR（Arts-Based Research）」の概念的枠組（岡原ほか, 2016; 岡原, 2017）と親和性が高い。

第7章は、映像実践をふり返りながら記された本研究の結論で、上映会での参加者との対話を通してえられた知見が整理されている。たとえば5人の調査協力者との関係をふり返るとき、実は調査者が一方的に「選ぶ」のではなく同時に協力者から「選ばれる」ことによって一連の協働が実現していたこと、あるいは「トランスナショナルな生活世界」に目を向けることの意義等を再確認する。その上で、映像実践の過程で生まれた対話の構造（およびその影響）を図解し、多様な対話の可能性が重層的かつ動的に進行していることを示している。「調査」「制作」に続く「上映」「個人の時間」「交流の時間」を明示することで、映像実践の過程がより広がりを持って提示される。調査者本人による省察的・告白的な考察は、移動に関わる現象を研究し、その成果を世に問いながら、調査者自らも移動するという「リサーチ・オン・ザ・ムーブ」という方法の提案で結ばれる。

加えて、本論文には題目にある『移動する「家族」- "Families" on the move』（32分の映像作品）を収録したDVDが添付されている。上述のとおり、4年間にわたって5名の調査協力者を取材し、協働で編集作業を進めた作品のオムニバスである。

2. 論文の評価

本論文の学術的意義は、以下の3点に要約できる。（1）まず、移動性/移動を前提に人々の「生きられた経験に根ざした知を創造すること」に向き合う視座を提供した点である。「グローバルズ」と呼ばれる社会経済的な階層に基づいて同定される人々ではなく、たとえば予期せぬ結果として日本に移動（移住）した人、あるいは家族の事情で不可避的に移動できずに一人暮らしの境遇になった人等、「トランスナショナル」という言葉が包摂しうる多様性の理解を促す視座を提示した。本研究ではとくに「家族」に光を当てているが、個別具体的な「生」は、映像と協力者本人によるナレーションとともに、ひとつのストーリーとして紡がれた。一人ひとりの個性が詳細に描かれることによって、私たちは「家族」という概念がある程度の普遍性を持って立ち現れることにあらためて気づかされる。

（2）つぎに、「トランスナショナルな生活世界」における「家族」に着目しながら、知のあり方（成果の公開方法、媒体の選択・組み合わせ）について提案を試みている点が、本研究の特質であり学術的意義のひとつだと言える。本文では、アメリカやカナダの大学における事例が引き合いに出されており（実際には類似の問題意識で運用されている学術的探究は他にもある）、たとえばカナダ連邦政府助成機関 **Social Sciences and Humanities Research Council** は「研究作品（Research Creation）」という言葉を用いて、学術的な調査・実験と作品づくりを組み合わせることによる創造的知識の生成を奨励している。それを受けてヨーク大学で実践されている「マルチモーダル博士論文」と、自

らの研究を重ね合わせ、そのモデルとして位置づけて議論を展開している。文章による論考ばかりではなく、映像作品によって知的探究の成果を示す可能性を問うのである。この形式を直ちに認めるためには、現実的な制度等の改革・変更を待つ必要があるが、本論文とともに提出される「研究作品」をも組み合わせた知のありようを実践的に提案している点は高く評価したい。本論文は、それ自体、学術的な水準を満たしていると評価できるが、類似の問題意識を持った後進の研究者に対して知見を提供し、議論の糸口を示唆するものである。

(3) そして、上映会をくり返しなが、調査者自身が自らの実践を問い直すという方法と態度は、定性的調査のあり方を考える上で貴重な成果である。審査委員会のメンバーからのコメントにもあったが、本論文では明示されないものの、実は大橋君自身が6人目の「協力者」となって自己との対話の場面をつくり、様々な知見や気づきを生み出していたと考えることもできる。主査としてたびたび進捗に関する面談を重ねてきたことをふり返り、その上で論文を通読すると、映像制作を行い、上映会をくり返すたびに大橋君が変化してきたことを実感する。とりわけ第7章は自らの実践の省察であり、協力者たちが日々直面している「痛み」に触れ、それを記録するだけでは研究者としての営みは完結しえず（それは、その「痛み」に寄り添うだけでもなく）、時には封印していた自分自身の過去の出来事にさえ再度向き合うことを強いられ、そのことに自覚的になってゆく。その筆致は、まさに調査者の「生」を感じさせるものである。一連の変化そのものは論文に再現されることはないが、それを目撃してきたことは確かな事実である。様々な条件が揃い、自己再帰的な対話を促し、加速するような仕組みが出来上がったと言えるだろう。対話を生み出すための仕組みという点では、ある一定の普遍的な構造を提示している点は大いに評価したい。まさに「リサーチ・オン・ザ・ムーブ」という概念で語らんとする自らが「動いていること (on the move)」を反映した調査研究である。協働作業において協力者との関係が変容すること、また、調査研究が「終了」の段階を迎え、協力者との「別れ」が訪れる際にどのような課題が考えられるのか。こうした点については、本研究をさらに発展させる上で、今後、中長期的に取り組むべき課題となるだろう。

本論文は、人々の移動性/移動を前提に「生きられた経験に根ざした知を創造すること」の価値をとらえる調査研究の発展を期待させるに十分な水準にあると判断する。大橋君は、本研究を通して自立的に調査研究および社会実践活動を遂行するために必要な学識、高度な分析能力、定性的手法の理解、成果を社会と接続してゆくマインドと能力を有することを示した。したがって、本学位審査委員会は、大橋香奈君が博士号（政策・メディア）を授与される資格が十分にあると認める。